

渡英子歌集

『しづかな街』

(本阿弥書店)

「寄風恋」とささめき散つてゆく白さるすべり、緋のさるすべり

赤い花と白い花が景としてあつたら、赤い花から詠む。そんな歌謡曲もあつた。しかし作者は白い花から詠った。

少し違うものの見方をする歌人だろうか、と読み進めるうち、それは大きな間違いだと気づいた。

人工透析中止を勧める医師の顔の引き締りたり紅潮ののち

降りながら晴れてゆく空すれちがふ少年の唇にピアス煌めく

作者は、短歌に当てはめるように景を歪めたり演出を加えたりせず、取り込んだ景をそのまま短歌にしてしまえる。それ故、すつと読んでしまうが、果たして自分がそのように詠めるか考えると、作者の目の曇りの無さ、作歌の力に愕然とする。また、四百四十首余りある収録歌のうち、句跨りに伴う破調や初句の字余りが百六十首以上あり、定型にとらわれない自由な詠みぶりが目立つ印象も受けた。

年一、二度訪ふ墓原の楡の木の大さくなりてわれはあふぐも

姉妹の墓所、長く住んだ沖縄でも、楡や椎の木を詠んでいる。それを想起させるような花山周子の装幀も美しい歌集である。

(磯川朋美)

外塚喬歌集

『不変』

(いりの舎)

二〇二〇年に詠まれた未発表作品を収めた歌集。そう聞けば誰もが「あの年か」と思うだろうが、疫禍についての歌はごく僅かで閉塞感ほとんど感じられない。その理由のひとつが植物の歌の多さだ。

蛇も蛙もみなくなりたる庭に咲く山茶花はこころなし
か不機嫌

よるこびのこゑをあぐるは人のみにあらず木立の高空に鳴る

庭で、あるいは散歩の途中で目にする種々の花や樹木が読者の心に季節ごとの戸外の空気を吹き込んでくれる。

もう一つの主題が自らの老い、そして鳥と庭仕事を愛する「連れ合ひ」との日々の暮らしである。ふたりだけの生活の手触りがユーモアと情感を持って詠まれている。

勝てさうな相手のますますみなくなり老人力の頼りに
ならず

鳥を見に行かうかと言へば鳥よりもうれしさうな声を
れを待つてゐた

あとがきには「わたしの人生において、空白の一年があつてはならないと、一冊に纏めました」とある。つらい記憶ばかりだったような気がするあの一年がこんなにも豊かな歌の連なりとして存在することに驚きさえ感じながらこの一冊を読み終えたのだった。

(前中 映)